

ある寒い朝

村上 理江

二〇〇〇年、私はアメリカ、ワシントン州にあるカレッジ内の語学学校に通っていた。

ある寒い朝、通学途中のバスの席で、うとうと居眠りをしていた。バスの終点は学校のキャンパスだ。寝過ぎ心配もない。前の晩、遅くまで課題をこなし、少々寝不足だった私はぐっすり眠り込んでしまった。

二十分程過ぎた時、突然誰かに肩を叩かれ目が覚めた。乗客の一人で金髪の女性が、私に向かって何やらまくし立てている。早口の英語がよく分からなかった私は、知らん顔でまた目をつぶった。

女性は、今度は私の身体を揺さぶり「Get up!」と大きな声で叫んだ。寝ぼけまなこで辺りを見回すと、車椅子に乗った男性が私をじっと見ている。

アメリカのバスは、車椅子の乗客がいる場合、備え付けのリフトで車椅子ごと乗車させる。そして、所定の座席を折りたたんでそのスペースに車椅子を乗せる。つまり、私が座っていた席はそのための簡易シートだったのだ。

私は、「Sorry」と謝りながら慌てて席を立った。座席は運転手によって瞬間に折りたたまれ、男性の車椅子が固定された。

私は、他の乗客が男性のためのスペースを空けようとしているときに、一人でぐうぐう眠っていたことを恥じる反面、大声でまくし立てられたことで、金髪の女性を少し恨んだ。何もみんなの前であんなに怒鳴ることないのに、と。

少し気まずい雰囲気車が車内を流れる中バスは終点に着いた。私はバス停の傍にあるスタンドでコーヒーを買おうとして財布を出したが、硬貨しか入っていなかった。仕方なくそのまま教室へと足を向けたその時、背後から声があった。

「Two cups of coffee」

先程の金髪女性だった。二杯のカップを両手に持ち、一つを私に渡すと、ポーンと私の肩を叩き「Never mind!」と言い残して、キャンパスに消えて行った。

その時飲んだコーヒーは、ちよっぴりほろ苦く、そしてとても温かった。